

りと感せしにこそ、公治長のためしもおもひいで、ふしぎなる事なり、

公治長并百鳥語書事

少納言藤原通憲信西の所持の書目録あり、めづらしき書ども多し、そのうちに公治長并百鳥語一卷とあるせり、むかしはかゝる書もわが國にわたりけむ、今は人の國にもものこりしやきかまほし、

〔甲子夜話 二十三〕或燕席ニテ某云シハ、木オロシ在郷ニ左兵衛ト云農夫、ヨク鳥ノ聲ヲ解ス、曰鳥ノ鳴聲ニ六十八ノ別アリテ、皆ソノ意アリ、譬ヘバ美飾セル婦女來レバ、乃豫メコレヲ告鳴ク、出テ見レバ果テ來ル、或ハ又コノ路ノサキハ水潦アル由ヲ鳴ケバ、行クニ果テアリ、能ク其未來ヲ告ルモノナリト語レリ、其人今在リト、又コノ如ク鳥語ヲ解スル、既ニ論語集解皇侃義疏ニ見ユ、然レバ昔ヨリ世ニ無キ事ニモアラズ、今時ノ事以テ計ルニ、異域千載ノ疑ヲ去ベシ、

鳥戰

〔視聽草 五集九〕雀合戰

森町 大洞寺

右境内奥八町計之間、雀合戰有之、其有様誠ニ珍事ニ御座候、右合戰去月廿九日○原書ニ文化今日迄十一二頃六日之間、日々あつまり、東西ニ別レ戰ヒ申候、西方之雀者鳩程も有之、東方之雀ハ平生之雀也、凡町數五六丁の間を隔此方又鳶鳥集り居、打死之雀をくらわんとす、勢ひ強く不叶體ニ而、一昨日ニ合戰ニ東方之雀を取らんとする一羽の雀鳶の頭ニ喰ひ付、其間ニ又々十羽程雀一むれ來り、たちまち鳶を追散し、一羽の鳶既にあやうき所江、西方之大雀七八羽飛來り、漸々鳶を助けたり、誠に珍敷見物之人夥鋪、十町程の間者爪も不立、先荒増申上候、

二月五日

猶以合戰初りハ晝七時過カ、入相の鐘を限りて戰ヒ申候、大洞寺江御參詣御見物御出待入候、

見附宿 銀藏